





参考図書について

本文は、両図書の文庫版によっています。

白夜行

集英社文庫

2009年10月24日 第41刷

著者 東野圭吾

発行所 株式会社 集英社

幻夜

集英社文庫

2009年12月30日 第22刷

著者 東野圭吾

発行所 株式会社 集英社

はじめに

白夜行は、東野圭吾氏の代表作として知られ、映像化や舞台劇化されるなど、魅力ある作品とされている。

だが、私個人の感想は、あまり好ましくなかった。

物語には引き込まれる。

常に第三者の視点で小説は進行し、主人公達がどのような行動をしているのかは、随所にちりばめられた事柄から、読者が推量するしかない。

しかし、心情を推し量ることは難しい。

主人公たちと周囲の人物との会話はあるが、それすらも、真実なのか偽りなのか。

行動したと思われる、結果だけが積み重ねられて、時間は過ぎて、物語は進行する。

そして最後、中心人物である主人公の一人は、その生を終える。

残った彼女は彼に背を向けた。

一片の感情も見せないまま、白夜行は終わった。

幻夜は、白夜行が発表された4年後に、発表された。

雑誌に連載された作品だったので、すでに白夜行の続編では？という疑問符つきの小説であった。

作者が明言してないので、正確には姉妹編と見るのが正しいのかもしれない。

書き方に明確な違いがあるものの、私自身は続編という見方をとっている。

白夜行の主人公の女性と、幻夜の主人公の女性が、酷似しているから、という理由だ。

肝心の内容だが、進行は第三者の視点がかかりを占めており、主人公の男性の心情が追加されている部分をのぞけば、白夜行に似ている。

主人公の女性を中心として起こり続ける、大小さまざまな凶悪事件。

渦中の人物は美しさに磨きをかけて、ひたすら階段を上り詰めていく。

感想として、両作品の読後感はよくない。

大小の出来事が緻密に描写され、物語の骨子が作られ、時事ネタの上に物語が成立していて（特に白夜行）「すごい作品」だと思う。

だが「好きか？ 何度でも読みたいか？」と聞かれると「好きになれない・・・もういい」と答える。

白夜行を初めて読んでから数年が経過したが、一度も読み返してないし、ドラマも見ていない。

それほど印象は強烈で、「無理に読まなくてもいい」という感想しかなかった。

なぜ突然に書き残しておくことを決めたのか、というと、幻夜を読んだからだ。

白夜行の続編らしい、と聞きつけて、「いつか読まなければ、気持ちが治まらない」と思い続けて、機会を得たので読んだ。

幻夜の感想をネットであちこち見てみたが、私の抱いた感想とは違った意見が多かった。

相変わらず読後感はよくなかったが、序盤の、主人公二人が出会った場面への考察が引き金に

なり、白夜行・幻夜への見直しが始まった。

それは思いがけないほど長くなった。

また、「白夜行」「幻夜」ともに、はじめて読んだ時の感想が、ややもすれば180度変わるほどに、私は二つの作品にのめりこんだ。

白夜行 第一章のまとめ

時間：1973年10月～1974年〇月

発見：1973年10月の土曜日、14時

被害者：桐原洋介（52）＝質きりはらの社長

発見者：近所の小学3年生

なにが：殺人

どこで：近鉄布施駅より西へ、真澄公園向こうの7階建て廃ビルの1階

どうやって：鋭利な刃物（果物包丁よりも細い）による刺殺（刺し傷＝胸に2箇所、肩に3箇所）

その他：桐原洋介が所持していたはずの100万円（財布含む）と、所持していたダンヒルのライターが行方不明

被害者のズボンのベルトの穴が二つ緩められていた

犯人：不明

関係者

桐原洋介＝被害者、桐原弥生子＝洋介の妻（30代半ば）、桐原亮司（小学5年）＝洋介の息子
松浦勇（40前後）＝質きりはらの従業員（約5年勤務、独身）

西本文代（30代半ば）＝うどん屋の店員で、質きりはらの客、西本雪穂（小学5年）＝文代の娘（母子家庭）

寺崎忠夫（40前後）＝文代の勤め先の客で、文代との交際を認める（独身）

桐原洋介の足取り（死亡推定時刻は、金曜日の18時～19時半）

14時 外出（行き先は告げず）

三協銀行布施支店で100万円を引き出す（家族、従業員には話していない）

近所の嵯峨野屋で食事

ハーモニーという洋菓子店を2軒はしごして、プリンアラモード4個を購入

17時 西本文代宅を訪問（その直前、西本文代が勤め先より帰宅）

18時 桐原洋介は西本宅を辞す

西本文代はスーパー（自宅より徒歩数分）へ外出

雪穂が図書館より帰宅

松浦勇に電話がかかってくる（18時、18時半、アリバイ成立）

桐原弥生子と亮司はテレビを見ていた

19時 質きりはら閉店、松浦勇は帰宅

19時半 西本文代、スーパーより帰宅（目撃証言あり＝スーパーそばの公園でぼんやりしていた、アリバイ成立）

20時 桐原弥生子と亮司は食事
寺崎忠夫のみ、アリバイは未成立

被害者：桐原洋介の頭髪（オールバック）や着衣に乱れはなく、格闘の痕跡もなし。
正面から刺されていることから、犯人は顔見知りの人間だったと思われる。
そして、被害者が犯人と廃ビルでなにをしていたのか、不明。

桐原洋介のズボンのベルト穴が二つ、緩めた状態だった。

笹垣刑事は、性行為だと主張する。

「被害者があの現場に行ってから、ズボンのベルトを緩める用事があったということですわ。それで今度締める時に、二つずれてしもうたというわけです。締めたのが本人か犯人かはわかりませんけど」

「なんや、ベルトを緩める用事で？」中塚が上目遣いに笹垣を見た。

「そんなもん、決まってますがな。ベルトを緩めて、ズボンを下ろしたんですわ」笹垣はにやりと笑って見せた。

中塚は椅子にもたれた。パイプの軋む音がした。

「ええ大人が、わざわざあんな汚うて埃っぽい場所で乳繰り合うたりするかい」P27、28

現場は廃ビルの中だが、そもそも完成してなかったのも、コンクリートむきだしのひどい状態だろう。

中は暗かった。カビと埃の臭いが混ざった空気が漂っている。P8

ダクトの四角い穴が天井のすぐ下にある。本来は金網をかぶせるのだろうが、もちろん今はそんなものはない。P14

このダクトがなければ、死体の発見はもっと遅れたかもしれなかった。というのは、死体の発見者は、このダクトから室内に入ったからだ。P15

彼等はビルの中を通っているダクトに入り、迷路ごっこをしていたのだ。たしかに、複雑に曲がりくねったダクトの中を四つん這いになって進むというのは、男の子にとっては冒険心をくすぐられるゲームかもしれなかった。P15

ただ、本文中に違和感を感じた。

桐原洋介が所持していた100万円の行方を捜査する描写が一切ない。

桐原弥生子と松浦勇に訊いたのが最後だ。

1973年（昭和48年）当時、大学生の初任給が約6万4千円である。

ほぼ年収に匹敵する大金が、捜査に何の影響も及ぼしていないのが不思議だ。

桐原洋介が100万円を所持した状態で行った場所は、

嵯峨野屋（食事）と洋菓子店ハーモニー（プリンを購入）と、西本文代宅である。

母子家庭の西本宅は、文代のパート代のみが収入で、何度か質屋に通っているのだから、かなり困窮していただろう。

だが、警察は、金銭がらみで事件を捜査していない。

行きずりの強盗殺人も捜査線上には上っていない。

ミステリとしては片手落ちに感じてしまう箇所だ。

話を戻す。

笹垣刑事の取調べに対し、桐原弥生子がなにかを隠している。

「外に女がおったとは思えません。あの人は、そういうことのできる人やなかったんです」断定的にいった。

「御主人を信用してはるわけですか」

「信用というか・・・」弥生子は語尾を濁し、そのまま俯いた。P35

西本文代への追及は、アリバイ成立で若干薄れたが、被害者との愛人関係が疑われたり、交際していたと考えられる寺崎忠夫との共謀も疑われている。

そして、寺崎忠夫も死んだ。

発見：11月

被害者：寺崎忠夫

発見者：

なにが：事故死

どこで：阪神高速大阪守口線

どうやって：典型的な居眠り運転による事故死？

その他：運転していた車の物入れから、桐原洋介が所持していたダンヒルのライターに酷似したライターが発見される（指紋はなく、ふき取られていた可能性がある）

犯人：被害者本人による過失

警察は容疑者の事故死により、捜査本部を縮小する。

何かを間違ってる。俺らは何か、全く違う道に入りこんでしまってるぞ—取り調べを横で聞きながら笹垣は思った。P76

笹垣刑事は、一人逡巡を続けている。

1974年

発見：雪穂が進級している（小学6年生）ので、翌年

被害者：西本文代

発見者：田川敏夫（西本宅のアパートを管理している不動産屋）

なにが：事故？自殺？

どこで：西本文代宅（玄関・窓はすべて施錠されていた）

どうやって：ガスレンジの鍋の吹きこぼれによる、ガス中毒

犯人：被害者本人による過失

死体発見時の描写で、第一章は終わっている。

亮司（本文抜粋）

十歳前後の少年だった。トレーナーにジーンズという出で立ちで、身体は細かった。P25

笹垣がどきりとしたのは、少年が階段を下りる音が聞こえなかったからではなかった。少年と目が合った瞬間、その目の奥に潜む暗さに、衝撃を受けたのだ。

「息子さん？」と笹垣は訊いた。

少年は答えない。代わりに松浦が振り返っていった。「ああ、そうです」

少年は相変わらず何もいわず、運動靴を履き始めた。顔には全く表情がない。

「リョウちゃん、どこへ行くんや。今日は家におったほうがええで」

松浦が声をかけたが、少年は無視して出ていった。

「かわいそうに。相当ショックやったんでしょうなあ」笹垣はいった。

「それもあるでしょうけど、あの子はちょっと変わったところがあるんです」

「どういうふうに？」

「それはまあ、口ではうまいこといわれへんけど」P25、26

靴を履く時、沓脱ぎの端に少し汚れた運動靴が置いてあるのが目に留まった。亮司のものらしい。彼は二階にいるのだ。

掛け金錠のついた扉を見て、少年は上で何をしているのだろうと笹垣は思った。P35

「亮司君。警察の者やけど、ちょっと話を聞かせてくれへんかなあ」笹垣は廊下に立って声をかけた。

しばらく返事がなかった。

—中略—

笹垣は襖を開いた。亮司は机に向かって座っていた。背中しか見えない。

「ちょっとええかな」

笹垣は部屋に足を踏み入れた。六畳の和室だった。向きは南西のようで、窓からたっぷりと日が入ってくる。

「僕、何も知らんから」背中を向けたまま、亮司はいった。

—中略—

笹垣は胡坐をかき、椅子に座っている少年を見上げた。「お父さんのこと、お気の毒やったな」亮司はこれに答えない。背中を向けたままだ。P60、61

本棚にマンガはなく、代わりに百科事典や、『自動車のしくみ』、『テレビのしくみ』といった子供向けの科学本が並んでいる。

目に付いたのは壁にかけられた額だった。そこには帆船の形に切り取られた白い紙が入れてあった。細いロープの一本一本まで、じつに細かく丁寧に表現されている。笹垣は演芸場などで見た紙切りの芸を思い出した。しかしあれよりもはるかに精緻な作品だった。「すごいな、それ。君が作ったんか」

亮司は額をちらりと見て、首を小さく縦に動かした。

へええ、と笹垣は驚きの声を上げた。正直な反応だった。「器用なものやな。これやったら商品になるで」

「訊きたいことって何ですか」亮司は尋ねてきた。見知らぬ中年男と雑談をする気はないようだった。

それならば、と笹垣は座りなおした。

「あの日はずっと家におったんかな」

「あの日？」

「お父さんが亡くなった日や」

「ああ・・・そうです。家にいました」

「六時から七時ごろは何をしてた？」

「六時から七時？」

「うん。忘れたか？」

首を一度捻ってから少年は答えた。「下でテレビを見てました」

—中略—

笹垣は一応、その時に放送された内容を訊いてみた。亮司は少し黙ってから口を開いた。彼の説明は、見事に整理されていてわかりやすかった。

—中略—

「そうか。お父ちゃんが帰ってけえへんから、心配したやろな」

うん、と亮司は小さく答えた。そしてため息をつき、窓のほうに目を向けた。つられて笹垣も外

を見た。夕空が赤かった。P61-63

本文から推察

桐原亮司は、無口で、父親が死んだこと、殺されたことに動揺する気配はなかった。

しかし、息子の溺愛ぶりは、小学生に個室を与えたり、百科事典や多くの書籍を与えていることからもうかがえる。

(後述の雪穂の困窮振りとは対照的である)

本が好きな少年で、家の二階に鍵で閉じ込められている日常にも、特に気にする様子は見られない。

身内には無口で、他人には標準語を話している。

また、玄人裸足の切り絵細工を得意とする。

雪穂 (本文抜粋)

鍵の外れる音がしてドアが開いた。しかしドアチェーンはかけられたままだった。十センチほどの隙間の向こうに、目の大きな少女の顔があった。陶器のように肌理の細かい、白い頬をしていた。

「母はまだ帰ってません」毅然とした、という表現がふさわしい口調で少女はいった。P38

警察手帳を取り出し、写真の貼ってある身分証明の頁を広げた。

彼女は写真と笹垣の顔を見比べた後、「どうぞ上がってください」といってドアをさらに大きく開けた。笹垣は少し驚いた。

「いや、おっちゃんらはここでええよ」

すると彼女はかぶりを振った。

「そんなところで待ってられたら、近所の人から変に思われますから」P39

少女は和室で、押入にもたれるようにして座り、本を読み始めた。背表紙にラベルが貼ってある。図書館で借りたものらしい。

「何を讀んでるの？」と古賀が話しかけた。

少女は黙って本の表紙を見せた。古賀は顔を近づけてそれを見て、へえ、と感心したような声を出した。「すごいものを讀んでるんやなあ」

「何や？」と笹垣は古賀に訊いた。

「『風と共に去りぬ』です」P40

笹垣たちが話している間も、少女は顔を上げることなく、本を読み続けていた。馬鹿な大人がくだらない無駄話で時間をつぶしているとでも思っているのかもしれない。P41

「お嬢さん、お名前は？」笹垣は少女に訊いた。いつもなら、お嬢ちゃん、と呼びかけるところだったが、彼女に対してはふさわしくないような気がした。P41、42

「雪穂ちゃん、質屋の『きりはら』という店、知ってるか」笹垣は訊いてみた。雪穂すぐには答えなかった。唇を舐めてから、小さく頷いた。「母が時々行きます」P42

笹垣は再び室内を眺めた。特に目的があったわけではなかった。ところが冷蔵庫の横のゴミ箱を見た時、思わず目を見開いていた。あふれるほどに入ったゴミの一番上に、『ハーモニー』のマークが入った包み紙が載っていた。

笹垣は雪穂を見た。すると彼女と目が合った。彼女はすぐに目をそらし、また本を読む姿勢に戻った。

彼女も同じものを見ていたのだと笹垣は直感した。

—中略—

笹垣は雪穂をちらりと見た。「その時、お嬢さんはどちらに？」

「ああ、この子は図書館に・・・そうやったね？」彼女は雪穂に確認した。

うん、と雪穂は返事した。

—中略—

笹垣は礼をいって、その場から立ち去った。道を曲がり、アパートが見えなくなってから、「臭うな」と古賀にいった。臭いますね、と若手刑事も同意した。

「金曜日に桐原が来たかと訊いた時、最初文代は来てないと答えそうな気配やった。ところが雪穂が横からプリンのことをいうたので、仕方なく本当のことをしゃべったという感じやった。雪穂にしても、ほんまは桐原が来たことを隠したかったんやないやろか。けど、俺がプリンの包装紙に気づいたから、嘘をつくのはかえってまずいと考えたんと違うかな」

「あの子やったら、その程度の機転はききそうですね」P42-51

ブラウスの上にカーディガンを羽織った女の子が、おそろおそろといった感じで顔を覗かせた。大きくて、どこか高級な猫を連想させる目が印象的だった。

—中略—

「あの、西本ですけど」と彼女はいった。

「西本さん？ どちらの？」

「吉田ハイツの西本です」

はっきりとした口調だった。

—中略—

「部屋を開けてほしいんです」

「部屋？」

「鍵がないから、家の中に入れたいんです。あたし、鍵を持ってないから」

「ああ」

田川にも、ようやく彼女のいたいことがのみこめてきた。

「おかあさん、家に鍵をかけて出かけてしもたんか」

雪穂は頷いた。上目遣いの表情に、小学生であることを忘れさせるほどの妖艶さが潜んでいて、田川は一瞬どきりとした。

「どこへ行ったのかはわからへんの？」

「わかりません。今日は出かけないっていったのに・・・それであたしも、鍵を持たずに出てしもたんです」

—中略—

おかあさんが帰るまで、もう少し待っていたらどうや—いつもなら、そういうところだった。だが心細そうに見つめてくる雪穂の姿を見ていると、そんなふうに突き放す台詞は吐きづらくなった。

「そしたら開けたげるわ。一緒に行くから、ちょっと待ってて」

—中略—

雪穂はランドセル姿ではなく、赤いビニール製の手提げ鞆を持っていた。

何かの拍子に、彼女の身体から鈴の音がちりんちりと鳴った。何の鈴だろうと田川は目を凝らしたが、外からはわからなかった。

—中略—

吉田ハイツに着くと、田川は一〇三号室のドアの前に立ち、一応ノックしてみた。さらに、「西本さん」と呼びかけてみた。だが反応はなかった。

「おかあさんは、まだ帰ってないみたいやね」雪穂のほうを振り返って彼はいった。

彼女は小さく頷いた。また、ちりん、と鈴の音がした。

田川は鍵穴に合鍵を差し込み、右に捻った。カチリと錠の外れる音がした。

—中略—

部屋に一步足を踏み入れた田川の目が、奥の和室で寝ている女の姿を捉えた。

—中略—

「ガスやっ。あぶないっ」

後から入ってこようとする雪穂を手で制し、自分の鼻と口を押さえた。そしてすぐ横の調理台に目を向けた。ガスレンジの上に鍋が置かれ、ツマミが捻られている。しかしレンジから火は出ていなかった。

田川は息を止めたままガスの元栓を閉め、調理台の上の窓を開け放った。

—中略—

「死んでるんですか」玄関のほうから声がした。

見ると、西本雪穂が沓脱ぎに立ったままだった。玄関のドアが開けっ放しになっており、逆光で彼女の表情はよくわからない。

「死んでるの？」彼女はもう一度訊いた。泣き声になっていた。P77-82

本文から推察

西本雪穂は、とても綺麗な少女だ。

大人に対しても物怖じせず対応し、警察に関わる事がどのようなことなのか、理解し、機転も利く。

ハーモニーのプリン・アラモード4個だが、雪穂よりも母である文代が食べて、ゴミ箱に捨てたのかもしれない。

(間取りは、台所兼食卓と居室のみ)

母親には関西弁を話す、他人には標準語を話している。

また、母親の死体発見時、常に彼女から鈴の音がしていた。

白夜行 第二章のまとめ

時間：1977年〇月（夏服の季節）

（追記あり）

1973年

発見：10月の土曜日、14時

被害者：桐原洋介（52）＝質きりはらの社長

発見者：近所の小学3年→菊池文彦の弟（菊池文彦＝小学5年、弟＝小学3年）

なにが：殺人

どこで：近鉄布施駅より西へ、真澄公園向こうの7階建て廃ビルの1階

どうやって：鋭利な刃物（果物包丁よりも細い）による刺殺（刺し傷＝胸に2箇所、肩に3箇所）

その他：桐原洋介が所持していたはずの100万円（財布）と、所持していたダンヒルのライターが行方不明

犯人：不明

1977年

発見：〇月（夏）、火曜日の21時ごろ

被害者：藤村都子（清華女子学園中等部3年）

発見者：川島江利子、唐沢雪穂（清華女子学園中等部3年）

なにが：ほぼ全裸状態で発見されたが、強姦はなかった

どこで：清華女子学園中等部近所の倉庫街

どうやって：藤村都子は帰宅途中、クロロホルム（推定）で昏睡状態に

その他：藤村都子の発見時、そばに小さな達磨のキーホルダーが落ちていた

犯人：不明

事件について（抜粋）

川島江利子は火曜と金曜の夜、唐沢雪穂と共に英会話塾に通っていた。もちろんそれは雪穂に影響されてのことだ。

一中略一

火曜日の夜、塾が終わった後、いつものように二人は並んで歩いていた。途中学校のそばまで来た時、家に電話するからといって雪穂が公衆電話ボックスに入った。江利子は腕時計を見た。午後九時近くになっていた。塾の教室で、いつまでもおしゃべりをしてきたからだ。

「お待たせ」雪穂が電話を終えて出てきた。「早く帰ってきなさいっていわれちゃった」

「じゃあ急がなきゃ」

「うん。近道を行かない？」

「いいよ」

いつもならバス通り沿いを歩くところだが、二人は裏道に入った。そこを通ると、三角形の長編を行くことになり、かなり時間が稼げるのだ。ただしいつもはあまり通らない。街灯がなくて暗いうえに、倉庫や駐車場ばかりが並んでいて、民家が少ないからだった。材木がたくさんつまれている、製材所の倉庫らしき建物の前に来た時だった。

「あれっ」といって雪穂が立ち止まった。彼女の目は倉庫のほうに向けられていた。

「どうしたの」

「あそこに落ちているの、うちの制服じゃない？」雪穂が一点を指差した。

江利子はその指の先を目で辿っていくと、壁に立てかけられた角材のすぐ横に、白い布のようなものが落ちているのが見えた。

「えっ、そうかなあ」彼女は首を捻った。ただの布じゃないの」

「違うよ。うちの制服だよ」雪穂は近づいていき、その白い布のようなものを拾い上げた。

「ほら、やっぱりそうだった」

—中略—

だが雪穂は破れた制服を持ったまま、周囲をきょろきょろと見回した。さらにそばの倉庫の小さな扉が半開きになっているのを見つけると、大胆にも中を覗いた。

早く帰ろうよ、と江利子がいかけた時だった。きゃっ、と雪穂が叫び、口を手で押さえてたじろいだ。

「どしたの？」江利子は訊いた。声が震えていた。

「誰か・・・倒れてる。死んでるかもしれない」と雪穂はいった。

倒れていたのは清華女子学園中等部三年二組の藤村都子だった。だが死んではいなかった。両手両足を縛られ、猿ぐつわをかまされていたうえに気を失っていたが、助けられて間もなく意識を取り戻した。

発見したのは江利子たちだったが、助けたのは彼女たちではなかった。彼女たちははっきり死体だと思い込み、警察に連絡した後は倉庫に近づかず、二人で手を握り合って震えていたのだ。

藤村都子は上半身が裸で、下もスカート以外すべて脱がされていた。P110—112

そして、第一発見者として、二人は警察官から幾つか質問を受けた。

警察官は変質者が犯人では、と考え、二人に怪しい人物の存在を訊く。

雪穂は、時折学校を除く同年代の男子の存在を告げる。

「でも」隣で雪穂がいった。「学校の中を覗いていたり、あたしたちが下校するところを待っていて、写真を撮ったりする人はいます」彼女は江利子を見て、「ねえ」と同意を求めてきた。

江利子は頷いた。連中のことを忘れていた。

「それはいつも同じ男？」と刑事が訊いた。

「覗いてる人は何人かいます。写真を撮っている人は・・・わかりません」江利子は答えた。

—中略—

「大江中学の人だと思います」雪穂がいった。その断定的な口調に、江利子も少し驚いて彼女を見た。

「大江？ 間違いない？」婦人警官が念を押す。

「あたし、前に大江に住んでたことがあるからわかるんです。あの校章は大江中学だと思います」

—中略—

「この間、あたしのことを写真に撮った人の苗字ならわかります。胸に名札をつけてましたから」

「たしか、アキヨシだったと思います。秋冬の秋に、大吉の吉です」
横で聞いていて、江利子は意外な思いがした。この前の様子では、雪穂は連中のことなどまるで無視していた。しかしじつは相手の名前をチェックしていたのだ。江利子は相手の名札など記憶になかった。P113—114

事件の概要だが、すべて雪穂主導で進められている。

雪穂が自宅の母から帰宅を急かされる → 雪穂が近道を提案 → 雪穂が道端の布を発見 → 雪穂が工場に侵入して、藤村都子を発見

そして、容疑者の主導もしている。

江利子の変質者に思い当たらないといったが、雪穂は違った。

学校を覗き込む男子の存在、自分の写真を撮影していた男子生徒の学校と苗字。

しかも、その時は無視して視線すら向けなかったはずの雪穂が。

「最後にこれを見てもらいたいんやけどね」刑事はビニール袋を出してきて、江利子たちの前に置いた。「現場に落ちていたもんやけど、見覚えはないかな」

ビニール袋の中に入っていたのは、キーホルダーの飾りのようだった。小さな達磨に鎖がついているが、その鎖が途中で切れていた。

「知りません」

と江利子は答えた。雪穂も同様の答えだった。P115

雪穂の写真を撮影していた大江中学の男子生徒の秋吉雄一は、刑事たちから執拗な取調べを受けた。

写真撮影は依頼されたからで、唐沢雪穂と藤村都子の二人で、依頼者は同級生の牟田俊之。

そして、見せられた小さな達磨のキーホルダーに驚いた。

それは菊池が持っていたキーホルダーの飾りに間違いなかった。

「知ってるようなな」刑事が彼の表情に気づいていった。P122

刑事たちは、菊池を取り調べたが、彼は、その時間は映画館で映画を見ていた、と主張した。

「意外なところから映画館の特別優待券が手に入ってなあ」雄一の疑問を見抜いたように菊池はいった。「おふくろが客からもろたらしい」

「ふうん。それはついてるなあ」

菊池の母親が近くの市場で働いていると言う話を雄一は聞いていた。

「ところが調べてみたら、有効期限が昨日までや。あわてて出かけたがな。－後略－」 P116

その後、菊池の疑いは晴れた。

だが、秋吉が明るく話を振っても、菊池はぶっきらぼうな口調のままだ。

犯行当日、映画館に行っていたことが証明されたが、うれしそうな様子はなく、秋吉に対して不機嫌だった。

そして、秋吉から4年前の事件の話を振られると、素っ気無く「もうやめた」と答えた。

菊池は立ち上がり、席を離れた。もうこれ以上話をしたくないという意思表示のようだった。

雄一は戸惑いながら菊池の背中を見送った。 P132

藤村都子の事件に、たえず介在していた雪穂。

亮司に向かって四年前の事件を掘り起こそうとした菊池は、事件の容疑者と目されたが、疑いは晴れた。

そして彼は、四年前の事件も忘れた。

亮司（本文より抜粋）

そこから現れたのは、雄一たちと同じクラスの男子生徒だった。名前は知っている。だが雄一は殆ど話をしたことはなかった。

桐原、といった。下の名前までは覚えていない。

雄一に限らず、誰もあまり彼とは親しくしていないようだった。何をする時でも特に目立つことはなく、授業中に発言することもめったにない。昼休みや休憩時間は、いつも一人で本を読んでいる。陰気な奴、というのが雄一の第一印象だ。

桐原は雄一と菊池の前で立ち止まると、二人の顔を交互に見つめた。その目にはこれまで見せたことのない鋭い光が宿っているようで、雄一は一瞬どきりとした。

「俺に何の用や」ぶっきらぼうな口調で桐原は訊いた。菊池が彼を呼び出したらしい。

「見せたいものがあってな」その菊池がいった。

「見せたいもの？」

「これや」菊池は例の封筒から写真を取り出した。

桐原は警戒した様子で近づき、写真を受け取った。白黒の画面を一瞥した彼の目が大きく見開かれた。「なんや、これ」

「何かの参考になるんやないかと思てね」菊池はいった。「四年前の事件について」

雄一は菊池の横顔を見た。四年前の事件とは何だ。

「何がしたい」桐原が菊池を睨んだ。P101、102

菊池は立ち上がり、席を離れた。もうこれ以上話をしたくないと言う意思表示のようだった。雄一は戸惑いながら菊池の背中を見送った。その時、別の方向からの視線を感じた。そちらに目を向けると、桐原が彼を見ていた。冷たく観察するような目に、雄一は一瞬寒気を感じた。だがそれも長い時間ではなかった。すぐに桐原は目を伏せ、文庫本を読み始めた。彼の机の上には布製の小物入れが置いてあった。パッチワークされたもので、R Kというイニシャルが入っていた。P132

本文より推察

桐原亮司は、大江中学で孤立した存在らしい。

菊池が四年前の事件を掘り起こそうとしたのを、苦々しく思っていたようだ。

その後、菊池は翻意したが。

本をよく読み、イニシャル入りのパッチワークの小物入れを持っていた。

雪穂（本文より抜粋）

理知的な顔立ち、上品だが隙のない身のこなし。江利子は彼女に、自分や自分の周りには友人たちにはないものを感じていた。P89

「唐沢雪穂よ」ゆっくりと彼女は名乗った後、一つ小さくうなずいた。自分のいったことに対して、確認するように頷くのが彼女の癖だということを、江利子はその後少ししてから知った。P90

「あたし、養女なの。中学に上がる前に、この家に来たのよ。さっきのおかあさんは、あたしのじつの母親ではないの」気負った様子もなく、自然な口調で、何でもないということのようにいった。

「あ、そうなんだ」

「大江に住んでいたのは本当。貧乏だったのも本当。お父さんがずっと前に死んじゃったからね。それからもう一つ、母親が変な死に方をしたというのも本当。あたしが六年生の時だった」

「変な死に方って・・・」

「ガス中毒」雪穂はいった。「事故死よ。でも、自殺じゃないかと疑われたこともあった。それくらい貧乏をしてたからね」

「そうだったの」

どのように相槌を打っていかかわからず江利子は戸惑ったが、雪穂のほうは特に重要なことを告白したつもりもなさそうだった。P94

それにしても、そんな苦境を乗り越えてきたというのに、この雪穂の優雅さはどうだろう、と江利子としては改めて感嘆するしかなかった。それともそれらの体験が、彼女を内面から輝かせているのだろうか。P95

川島江利子は火曜と金曜の夜、唐沢雪穂と共に英会話塾に通っていた。

—中略—

その間雪穂は、演劇部の練習に参加している。P111

江利子は曖昧に頷いた後、雪穂の手元を見て微笑んだ。先日彼女の家で見せてもらった小物入れが、もう殆ど縫い終わっている。「もうすぐ完成やね」

「うん。あとは仕上げをするだけ」

「でもそれ、イニシャルがR Kになってるね」縫いつけられたアルファベットを見て江利子はいった。「雪穂だから、Y Kやないの？」

「いいの、これはおかあさんへのプレゼントだから。おかあさんの名前はレイコなの」P125、126

事件から四日経った土曜日、江利子は行き穂と共に藤村都子を見舞うため、彼女の家を訪れた。雪穂が提案したことだった。

だが応接間で待っていても、都子は現れなかった。代わりに彼女の母親がやってきて、娘はまだ誰にも会いたくないらしいと、申し訳なさそうにいった。

—中略—

「犯人はわかったんでしょうか」雪穂が訊いた。

—中略—

「それは構いませんけど・・・藤村さん、犯人の姿は見ていないんですか」雪穂が呟くようにいった。P128

はっきりと口に出したことはないが、二人で事件のことを話す時には、都子は犯されたのだろうということを前提にしてきたからだ。

「ええ、信じます」だが雪穂は、そんなことは考えたこともないという口調で答えた。

—中略—

「決して誰にもいいません。そんな噂が流れ始めても、あたしたちさえ否定したら済むことですから。藤村さんに伝えてください。あたしたちが絶対に守ってみせるから、安心してってください」P129

本文より推察

唐沢雪穂は、大江中学の男子生徒から注目される存在になっていた。
どこからともなく前歴を学内に流布されていたようだ。
ある程度は事実だが、憶測が憶測を呼び、口さがない女子は散々に言っていたようだ。
衝撃的な事件に遭遇したにも関わらず、江利子と違い、雪穂は気丈だ。
また、被害者の家族に対して、被害者をかばう発言をしているが、
つらい記憶が生々しいときに、執拗に犯人や犯行について質問している。
母親のイニシャルというR Kを縫い付けた小物入れを作っていた。

桐原洋介殺人事件の捜査についての追記（本文より抜粋）

「なんでそんなにその事件にこだわる？」不思議になって雄一は訊いた。
菊池は写真をしまいながら、上目遣いに見返してきた。
「死体を見つけたのは俺の弟や」
「弟？本当か」
「ああ」と菊池は頷いた。
「弟の話聞いて、俺もそこへ見に行った。そうしたら本当に死体があったから、おふくろに知らせ、警察へ連絡してもらたんや」
「そういう関係があったんか」
「発見者ということで、俺らは何遍も警察から質問された。しかしな、警察の連中は単に発見したときのことだけを訊きたかったわけやない」
「どういう意味や」
「警察はこういうことも考えとった。被害者は金を盗まれている。犯人が奪ったと思われる。けど、第三者が盗んだ可能性もある」
「第三者で・・・」
「死体発見者が、警察に知らせる前に金目のものをネコババするということは、珍しい話ではないそうや」菊池は口元に薄笑いを浮かべていった。「いや、それだけやない。警察の奴等は、もう一歩進んだことも考えとった。自分で殺しておいて、自分の息子に死体を発見させる—そういう手もあるんやないかと」
「まさか・・・」
「嘘みたいやろ。ところが本当の話なんや。家が貧乏というだけで、俺らは最初から疑いの目で見られとった。俺のおふくろが桐原のところの客やったということにも、警察はこだわっとったみたいや」
「けど、疑いは晴れたんやろ」
菊池はふんと鼻を鳴らした。「そういう問題やない」P106、107

第一発見者は、家族まるごと捜査対象になったようだ。
となると、第一章の雪穂が、警察に対する周囲からの視線に慎重だったのは、正しい行動だった

といえる。

善意の第一発見者がこの扱いだっただから、死んだ寺崎忠夫との共謀を疑われた西本文代の心労は、想像を絶する状態だったと思われる。

家賃を滞納していたことから、勤務先を解雇されていた可能性もある。

第一章最後の西本文代の事件は、事故だったのか、自殺だったのか。

また、事件の後、母親を亡くした西本雪穂は、偶然にも、亡くなった父親の従兄弟である唐沢家へ養女となっている。

苗字も住居も通う学校も、生活環境のすべてが変わった彼女だが、過去は執拗に追いかけてきたようだ。